

## 文部科学省委託研究 「平成29年度全国学力・学習状況調査を活用した 専門的な課題分析に関する調査研究」

○本研究は、平成29年度全国学力・学習状況調査の追加調査として実施した「保護者に対する調査」の結果等を活用し、家庭状況と学力の関係、成果を上げている学校の取組等を分析するものである。（保護者調査は平成25年度にも実施。2度目）

\* 文部科学省の委託により国立大学法人お茶の水女子大学（代表：浜野隆[教授]）が分析

国立大学法人お茶の水女子大学

# 保護者調査の概要

- 1. 調査対象と回収状況

一無作為に抽出された公立学校における本体調査を受けた児童生徒の保護者

	保護者			学校		
	対象数	有効回収数	回収率(%)	対象数	有効回収数	回収率(%)
小学校	60,167	55,167	91.7	1,186	1,153	97.2
中学校	77,491	67,309	86.9	799	692	86.6

- 2. 調査時期：平成29年5月

- 3. 調査内容：保護者の子供への接し方、教育に対する考え方、学校・地域との関わり、保護者の行動、経済状況等

- 4. ウェイトづけ：全国レベルでの推定を可能としている

# 本報告（スライド）の構成

- 1. 家庭の社会経済的背景（SES）と学力の関係
- 2. 「非認知スキル」と子供の学力
- 3. 不利な環境を克服している児童生徒の特徴
- 4. 学校風土と子供の学力
- 5. 家庭環境と子供の学力
- 6. 事例分析
  - （1）継続的に高い成果をあげている学校
  - （2）成果を上げつつある学校
- 7. その他の分析

# 1. 家庭の社会経済的背景 (SES) と 学力の関係

	小6							
	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)
Lowest SES	68.00	(0.30)	48.44	(0.51)	69.68	(0.33)	36.29	(0.60)
Lower middle SES	72.69	(0.26)	54.45	(0.43)	76.21	(0.27)	42.29	(0.52)
Upper middle SES	76.59	(0.22)	59.68	(0.38)	81.00	(0.23)	47.68	(0.47)
Highest SES	81.99	(0.18)	67.36	(0.32)	87.58	(0.17)	57.69	(0.41)
合計	74.79	(0.25)	57.44	(0.42)	78.58	(0.26)	45.94	(0.52)

【注】 家庭の社会経済的背景(SES(Socio-Economic Status)) :

「保護者に対する調査」結果から、家庭所得、父親学歴、母親学歴の三変数による合成指標。  
これを四等分し、Highest, Upper middle, Lower middle, Lowestに分割して分析。

	中3							
	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)
Lowest SES	70.43	(0.28)	63.14	(0.43)	52.84	(0.45)	38.78	(0.50)
Lower middle SES	75.56	(0.23)	69.96	(0.35)	61.45	(0.37)	44.90	(0.45)
Upper middle SES	78.94	(0.21)	74.26	(0.31)	67.40	(0.31)	49.66	(0.41)
Highest SES	84.76	(0.16)	81.39	(0.25)	77.08	(0.24)	58.90	(0.35)
合計	77.29	(0.23)	72.02	(0.35)	64.47	(0.36)	47.88	(0.45)

- 小6、中3とも、SESが高いほど正答率が高い(平成25年度と同様の知見)
- 小6、中3とも、SESが高いほど正答率の学力のばらつきが小さく、SESが低くなるほどばらつきが大きい(Lowest SESにおいても一定の高学力者の存在)  
(今回新たに見いだされた知見)

## 学力に対するSESの影響力の2時点比較 (平成25年度と平成29年度)

- SESスコアを独立変数、正答率を従属変数として回帰分析を行い、その標準化回帰係数がどのように変化したのかを見た。

	H25	H29		H25	H29
国語A(小6)	0.344	0.291	国語A(中3)	0.292	0.311
国語B(小6)	0.299	0.300	国語B(中3)	0.262	0.282
算数A(小6)	0.341	0.338	数学A(中3)	0.381	0.398
算数B(小6)	0.345	0.350	数学B(中3)	0.370	0.361

- 家庭の社会経済的背景(SES)の学力への影響の変化は、小・中学校ともに教科により様々であり、全体としての傾向を明確に読み取ることは難しい。

## 学力に対するSESの影響力の2時点比較 ：学力層（A層～D層）別にみたSES構成比の変化

- 小学校国語Aについていえば、A層に占めるLowestの増加とHighestの減少によって特徴づけられる。一方、D層について見ると、平成25年度と平成29年度はSES構成比に変化はほとんど見られない。
- 小学校の国語B、算数A、算数Bについては、さほど大きな変化は見られない。
- 中学校について見ると、いずれの教科、問題でも、D層に占めるLowestの比率が高まっている。一方、D層に占めるHighestの比率はいずれの教科、問題でも低下している。

【注】 学力層は、児童生徒全員の正答数分布の状況から四分位により分類し、正答数の高い順に、学力A層、学力B層、学力C層、学力D層としたものである。



# 学力に対するSESの影響の変化

## ： 学力層（A層～D層）別にみたSES構成比の変化（小学校）

小6国語A			家庭の社会経済背景（SES）				合計
			Lowest	Lower-middle	Upper-middle	Highest	
学力層	A層	H25	12.9%	20.3%	25.2%	41.6%	100.0%
		H29	16.3%	21.5%	26.3%	35.9%	100.0%
	B層	H25	20.2%	25.2%	27.5%	27.0%	100.0%
		H29	22.3%	25.7%	26.0%	26.0%	100.0%
	C層	H25	26.8%	28.0%	26.3%	18.9%	100.0%
		H29	27.9%	27.8%	25.9%	18.4%	100.0%
	D層	H25	38.3%	27.8%	22.1%	11.7%	100.0%
		H29	39.2%	29.1%	20.2%	11.5%	100.0%

# 学力に対するSESの影響の変化

： 学力層（A層～D層）別にみたSES構成比の変化（中学校）

中3国語A		家庭の社会経済背景（SES）				合計	
		Lowest	Lower-middle	Upper-middle	Highest		
学力層	A層	H25	13.0%	18.8%	25.8%	42.4%	100.0%
		H29	15.0%	19.4%	26.3%	39.3%	100.0%
	B層	H25	20.1%	22.6%	28.1%	29.2%	100.0%
		H29	22.7%	24.7%	27.2%	25.4%	100.0%
	C層	H25	27.7%	25.6%	26.4%	20.3%	100.0%
		H29	30.5%	26.5%	25.5%	17.5%	100.0%
	D層	H25	37.5%	27.3%	22.6%	12.7%	100.0%
		H29	41.3%	26.9%	21.2%	10.6%	100.0%

## 2. 「非認知スキル」と子供の学力

- 「非認知スキル」

- 「非認知スキル」とは、一般的には、自制心や意欲、忍耐力などを指す概念であるが、本研究では、児童生徒質問紙から以下の項目を合成して「非認知スキル」の指標とした。

- ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
- 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。
- 自分には、よいところがあると思う。
- 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。
- 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。
- 友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる。
- 学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている。
- 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。

	小6			中3		
	総正答率 (国語算数AB)	「非認知スキル」	SES	総正答率 (国語数学AB)	「非認知スキル」	SES
総正答率 (国語算数AB)	1			1		
「非認知スキル」	0.27	1		0.20	1	
SES	0.38	0.15	1	0.39	0.10	1

- 家庭の社会経済的背景(SES), 「非認知スキル」, 子供の学力がそれぞれどのように関連するのかを検討。
- 「非認知スキル」は, 子供の学力にゆるやかな相関があり, 小6の方が中3よりも学力との相関がやや強い。
- 一方, 「非認知スキル」とSESの間には, あまり相関が見られない。
- こうしたことから, SESの高低にかかわらず(SESが相対的に低い場合でも), 「非認知スキル」を高めることができれば, 学力を一定程度押し上げる可能性がある。(ただし, 今回の分析では両者の間にゆるやかな相関があることが確認できたにすぎないため, この可能性がどの程度確かなのかはさらなる検討を必要とすることに留意。)

## 学力に対するSESと「非認知スキル」の影響（重回帰分析）

	小学校		中学校	
	B	ベータ	B	ベータ
定数（切片）	66.775		67.330	
「非認知スキル」 得点	4.318	0.213***	3.518	0.164***
SESスコア	6.194	0.344***	7.130	0.374***
調整済みR二乗値	0.186		0.179	

\*\*\* p<0.001

- 保護者の適切な働きかけは、SESの高低に関わらず、子供の「非認知スキル」を高める傾向があり、小学生でより強い影響がある。

### <「非認知スキル」の向上を規定する主な保護者の働きかけ>

- 子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている。(小6・中3)
- 子供に努力することの大切さを伝えている。(小6・中3)
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。(小6・中3)
- 毎日子供に朝食を食べさせている。(中3)
- 地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している。(中3)

SES統制後の標準偏回帰係数 (係数0.1以上の項目を表示)	小6	中3
ほめて自信を持たせる	0.105***	0.116***
努力の大切さを伝えている	0.131***	0.107***
最後までやり抜くことの大切さを伝えている	0.130***	0.114***
毎日子供に朝食を食べさせている		0.101***
地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう 子供に促している		0.102***

\*\*\* p<0.001



### 3. 不利な環境を克服している 児童生徒の特徴

- 保護者のSESがLowestに区分されている児童生徒のうち、国語・算数（国語・数学）のA・B問題すべての正答数を合算して算出した「総正答率」（総正答数÷総問題数）で上位25%（A層）に位置する子供を「**不利な環境を克服している児童生徒**」と定義。
- SESの違いに起因する差と学力水準の違いに起因する差を踏まえた分析を行うため、以下の3者を比較。

- ・ 不利な環境を克服している児童生徒（SESがLowestで学力A層の子供）
- ・ 学力水準が同じでSESが違う層（SESがUpper middle以上で学力A層の子供）
- ・ SESが同じで学力水準が違う層（SESがLowestで学力B層-D層の子供）

- 不利な環境を克服している児童生徒の保護者は、同じSESで学力B層～D層である場合に比較して、規則的な生活習慣を整え、文字に親しむように促す姿勢、知的な好奇心を高めるような働きかけを行っている点の特徴である。また、行事やPTA活動に参加するなど、学校教育に対する親和的な姿勢が見られる。

		小6	中3
毎日子供に朝食を食べさせている （「あてはまる」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	94.5%	90.4%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>86.6%</b>	<b>85.2%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	78.9%	73.2%
子供に本や新聞を読むようにすすめている （「あてはまる」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	46.0%	33.2%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>25.5%</b>	<b>20.1%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	16.2%	12.5%

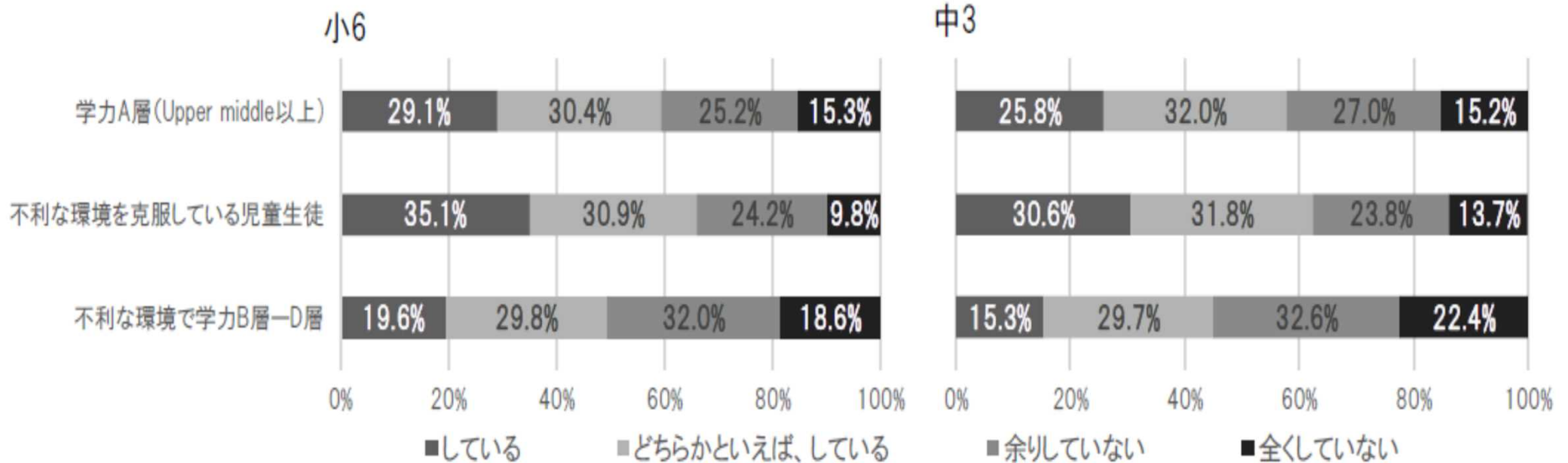
		小6	中3
子供が小さいころ 絵本の読み聞かせ をした（「あては まる」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	59.1%	58.4%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>39.9%</b>	<b>39.1%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	30.3%	31.1%
計画的に勉強する よう子供に促して いる（「あてはま る」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	47.6%	40.6%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>28.1%</b>	<b>28.1%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	19.5%	21.4%
PTA活動や保護者 会などへの参加 （「よくする」の 割合）	学力A層（Upper middle以上）	49.9%	37.2%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>37.6%</b>	<b>27.9%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	31.8%	21.3%

- 不利な環境を克服している児童生徒は、ものごとを最後までやり遂げる姿勢や、異なる考えをもつ他者とコミュニケーションする能力等の「非認知スキル」が高い傾向がある。

		小6	中3
ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある（「あてはまる」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	82.9%	80.1%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>77.9%</b>	<b>77.3%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	67.3%	69.6%
学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている（「そう思う」の割合）	学力A層（Upper middle以上）	20.9%	14.6%
	<b>不利な環境を克服している児童生徒</b>	<b>17.6%</b>	<b>12.7%</b>
	不利な環境で学力B層～D層	10.9%	7.9%

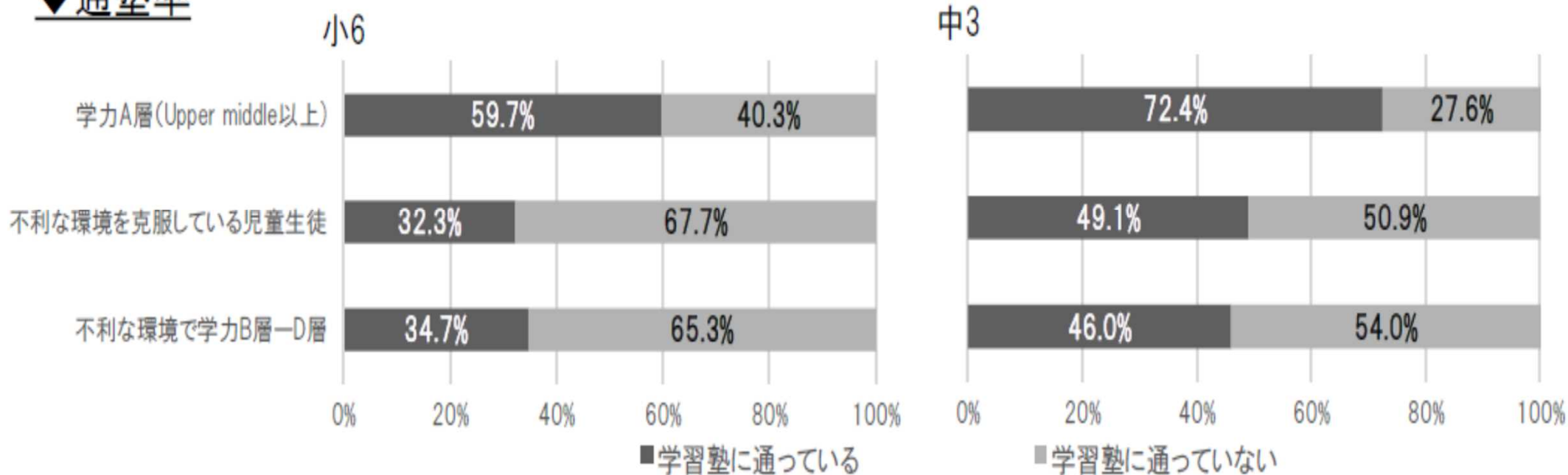
- 不利な環境を克服している児童生徒は、授業の復習を重視する傾向が強く、学校で習う内容の着実な定着を図る取組が、彼らの高い学力水準の支えになっていると考えられる。

### ◆学校の授業の復習

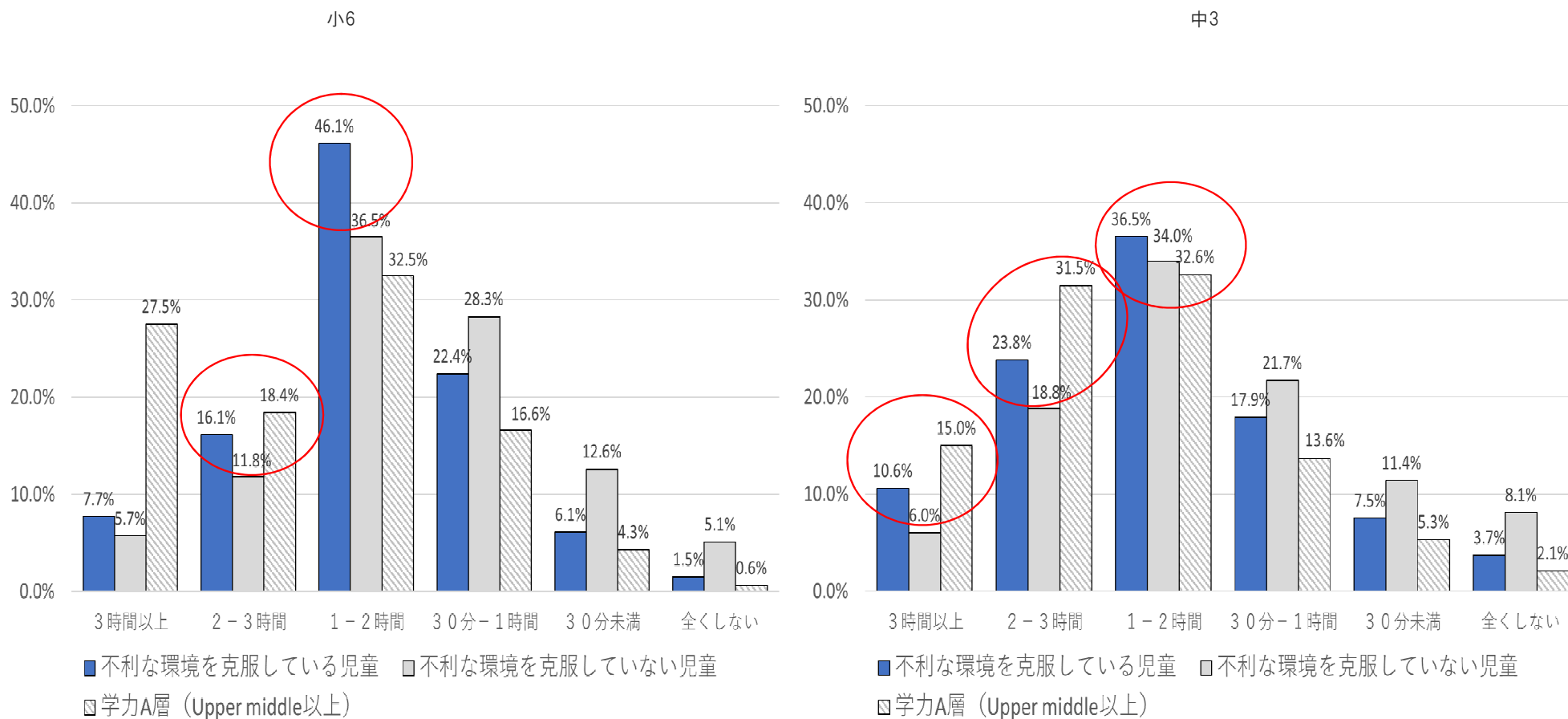


- 不利な環境を克服している児童生徒は、塾などに過度に頼らなくとも一定の学習時間を確保しており、そのことが学力獲得に結びついていると考えられる。

## ◆通塾率



# 学習時間：不利な環境を克服している児童生徒



図表 児童生徒の家庭の社会的経済的背景(SES)と学力による分類×平日の学習時間(学校以外・塾など含む)



## 4. 学校風土と学力

- 継続的に高い学力をマークしている学校への訪問インタビュー調査を行うと、しばしば「その学校には勉強を頑張る風土がある」などのように聞き取れる。
- 児童生徒の学習意欲などのいわゆる「学校風土」は、学力とどのような相関関係にあるのか。平成25年度から平成29年度までの5年分の学校を継続的に調査したパネルデータを作成し、継続的に高い学力をマークする学校の特徴を明らかにした。

## 学校風土得点の尺度構成

下記を加算し、標準化した変数を分析に用いた。

(クロンバッハの $\alpha$ :小6=0.826 中3=0.827)

- 調査対象の児童生徒は、熱意をもって勉強している
- 調査対象の児童生徒は、授業中の私語が少なく、落ち着いている
- 調査対象の児童生徒は、礼儀正しい
- 調査対象の児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができる
- 調査対象の児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、相手の考えを最後まで聞くことができる

- 学校風土得点の向上は，学校の社会経済的背景（SES）の影響を取り除いても，学力向上にプラスに作用する。

学力スコアの推定結果（固定効果モデル）				
	小 6		中 3	
	推定値	標準誤差	推定値	標準誤差
<b>学校風土得点</b>	1.251	0.018***	1.191	0.023***
学校SES（ref.学校SES1）				
学校SES2	-0.305	0.193	-0.929	0.217***
学校SES3	-0.446	0.074***	-0.324	0.114**
学校SES4	-0.550	0.072***	-0.44	0.111***
学校SES5	-0.857	0.072***	-0.734	0.110***
学校SES6	-1.166	0.084***	-0.987	0.210***
学校SES7	-1.624	0.106***	-1.323	0.139***
学校SES（不明）	-2.097	0.200***	-1.596	0.225***
調査年度（ref.平成25年度）				
平成26年度	4.317	0.044***	2.108	0.051***
平成27年度	1.994	0.044***	-0.581	0.051***
平成28年度	1.877	0.044***	-0.531	0.052***
平成29年度	2.083	0.044***	2.836	0.052***
定数	62.506	0.067***	63.301	0.104***
R2(within)	0.182		0.239	
			**p<.01	*** p<.001

【注】就学援助を受けている者の在籍割合を学校SESと表記。分析に用いる就学援助を受けている者の在籍割合は、「在籍していない」を「学校SES1」、「5%未満」を「学校SES2」、「5%以上、10%未満」を「学校SES3」、「10%以上、20%未満」を「学校SES4」、「20%以上、30%未満」を「学校SES5」、「30%以上、50%未満」を「学校SES6」、「50%以上」を「学校SES7」と表記し、無回答は「不明」として分析ケースに含め、「学校SES不明」と表記。

## 5. 家庭環境と子供の学力

以下の場合に，子供の学力が高い傾向がある。

### <保護者の働きかけ>

- 学校の出来事，友達のこと，勉強や成績のこと，将来や進路，地域や社会の出来事やニュース等，会話が多い。
- テレビ・ビデオ・DVDを見たり，聞いたりする時間などのルールを決めている。
- 子供に努力することの大切さを伝えている。
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。

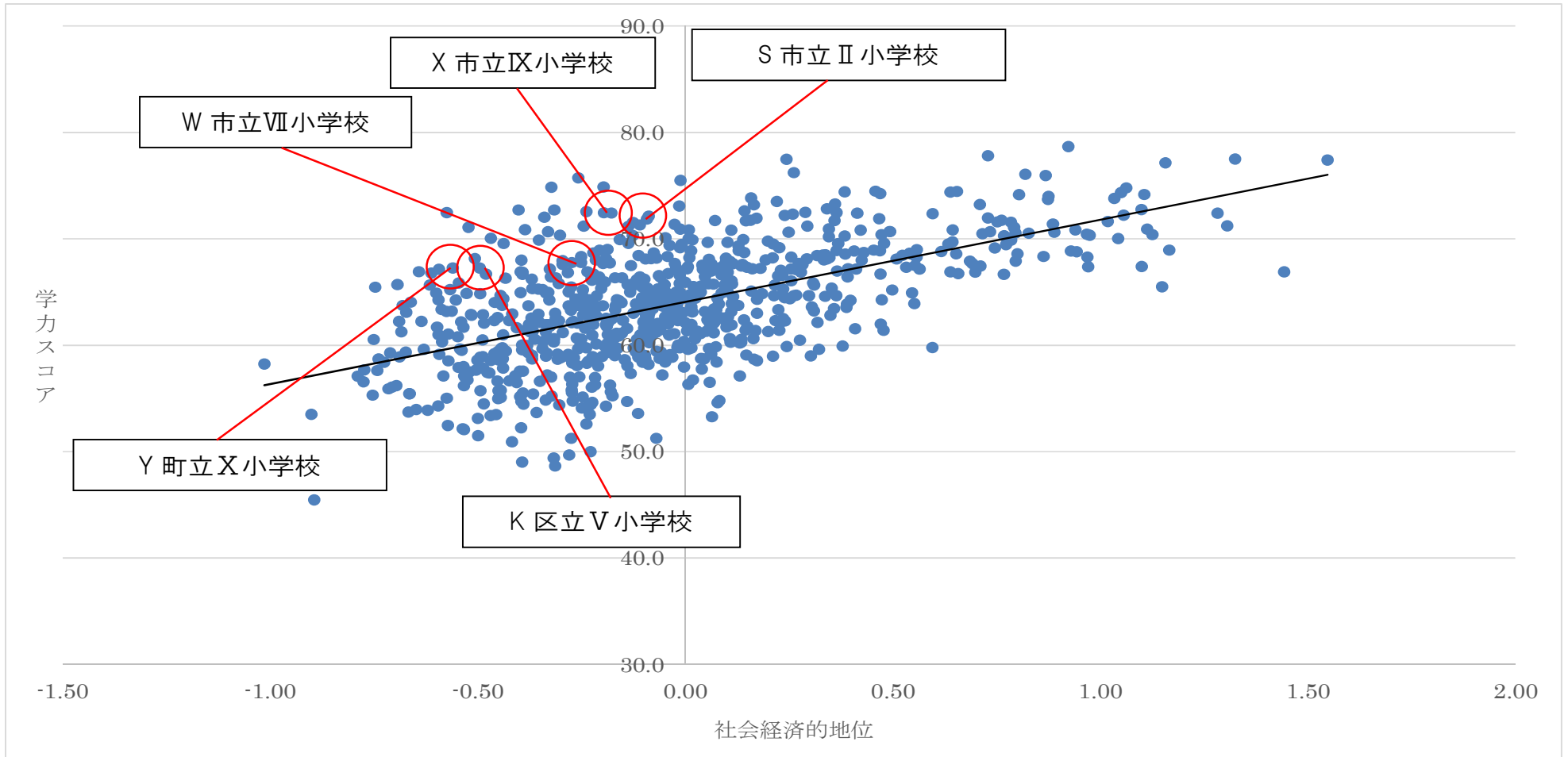
### <保護者の教育意識や諸活動への参加>

- 将来，子供に留学をしてほしいと思っている。
- 自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している。
- 地域や社会に貢献するなど人の役に立つ人間になることを重視している。
- 保護者自身がPTA活動や保護者会などへの参加している。

## 6. 事例分析

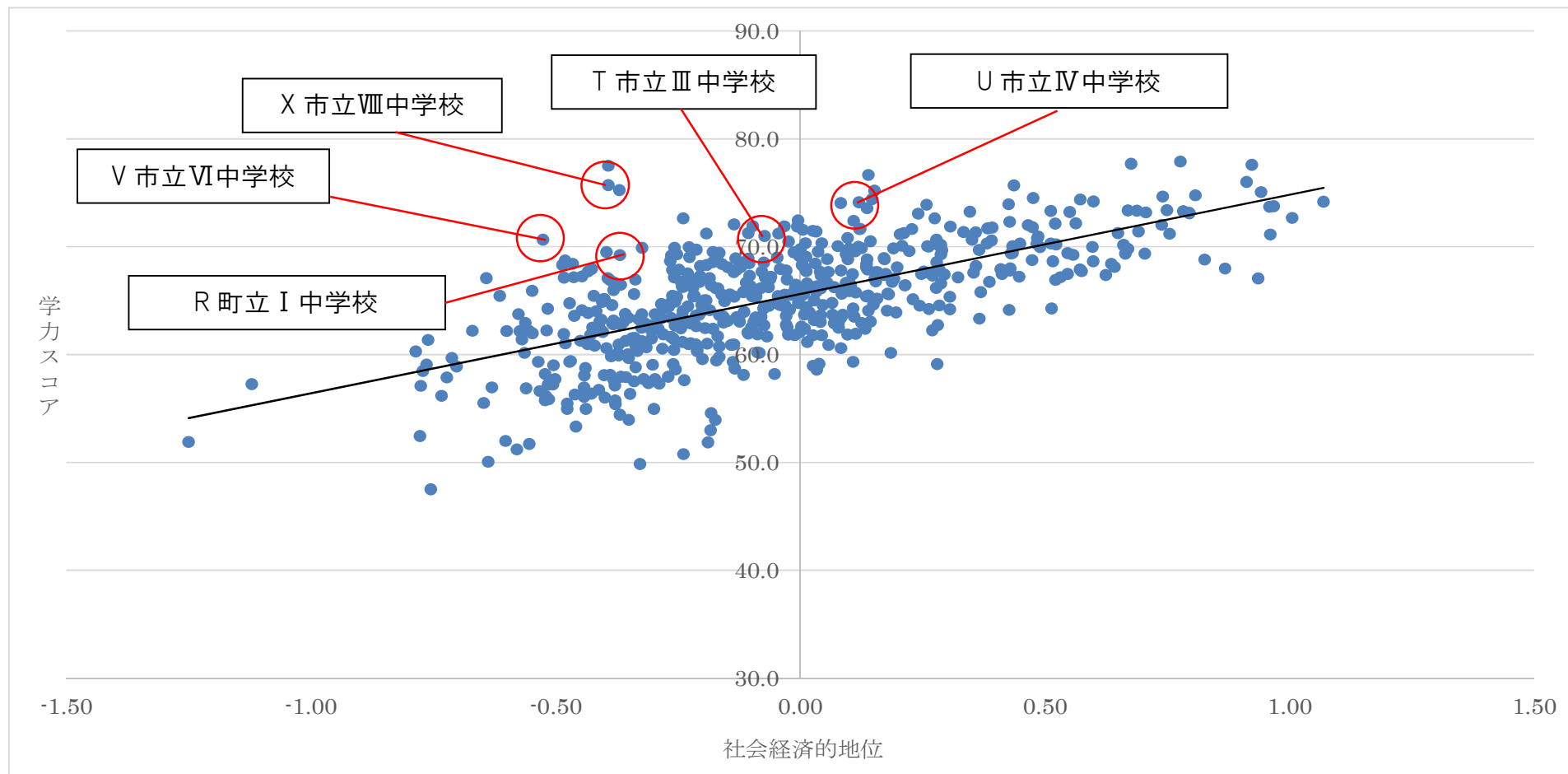
### (1) 継続的に高い成果をあげている学校

平成 29 年度・学校の学力と社会経済的背景の関係—抽出対象校(757 校)(小 6)





平成 29 年度・学校の学力と社会経済的背景の関係—抽出対象校(580 校)(中 3)



## 訪問調査の概要

- 具体的な調査対象：小・中学校と管轄教育委員会
- 調査方法：  
学校では管理職と教諭2名のインタビュー、授業参観(国語、算数・数学)  
教育委員会の担当者(教育長、学力向上担当、指導主事等)へのインタビュー
- 調査内容：  
小・中学校では学力形成に関わる学校の取組(特色ある取組、学習指導の取組)、教師個人の学力・学習観 教育委員会では当該学校が5年間継続して高い成果を挙げていると考えられる理由

## <平成29年度調査で特徴的に見られた点>

平成25年度調査で見られた取組は確実に実施されており、さらに手厚い取組として、以下が共通の特徴。

- 家庭学習習慣の定着と家庭への啓発，一人も見逃さない個別指導  
(例：放課後や昼休みなどに個別に呼んで手厚くきめ細やかに指導。)
- 若手とベテランが学び合う同僚性と学校の組織的な取組  
(例：面倒見の良いベテラン教師と学年を組む。初任者や若手教師の研修機会を生かして全校教師が学び合う。)
- 小中一貫教育による一貫した学習の構え  
(例：小中で家庭学習の方法，学習ルールや授業スタイルを統一。話し合いや書く力，読書習慣・言語指導の重点を共有。)
- 言語活動や学習規律などを重視した授業改善の推進  
(例：子供の名前を出しながら授業研究を行う。考えを伝え合うための支援や場の工夫。)
- 地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域との連携  
(例：地域の一員として、防災活動に取り組む。自治体でキャリア教育を推進。地域人材リストの作成。)
- 学力調査の分析・活用による児童生徒一人ひとりの学力形成  
(例：一人一人の子供の学習状況に着目。前年の学習定着の課題を教師で共有，授業改善に活用する。)

		平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
1	家庭学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿題+自主学習(自学、自勉)。</li> <li>・必ず教師がノートに手を入れ子供に返す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭学習の手引きや保護者啓発</li> <li>・良いノートを紹介し、取り組めない子供には手厚く指導する(一人も見逃さない)。</li> </ul> <p>→家庭学習ができるような支援。 家庭学習の交流、調べ学習や課題発見の力につなぐ取組。</p>

		平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
2	管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教師研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科を超えて研究授業を見せ合い、チーム意識を高める。</li> <li>・積極的に他校の授業を見に出かける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若い教師の研修を生かした校内研修。</li> <li>・一人一授業で日常的に研究授業。</li> <li>・授業研前後の活発な授業研究。</li> <li>→世代を超えた同僚性の構築。 （若手とベテランが学び合う。）</li> <li>→授業を通じた力量形成。</li> </ul>

		平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
3	小中連携教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程や学習面で連携し、系統性を持った指導を図る、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中で一貫した学習ルール・学習の構え。</li> <li>・小学校から学ぶ問題解決の授業。 <ul style="list-style-type: none"> <li>→生涯を見通した学習観。</li> <li>→地域で活躍する人材育成。</li> </ul> </li> <li>・幼保小連携。</li> </ul>

		平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
4	言語活動・学習規律の重視	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書くこと、話すこと、聞くことを大切にする。</li> <li>・ノート指導。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習規律を前提に対話的な授業。</li> <li>・課題を明確にする教師の授業力。</li> <li>→学ぶことが当たり前になる学校づくり</li> <li>→話し合い、学び合う授業。</li> </ul>

		平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
5	学力調査の活用	・学校の課題を明確にする際に活用。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の課題を明確にする。</li> <li>・質問紙調査から学校の課題を見出す</li> <li>・学力の経年変化調査。</li> <li>・学力や家庭の協力の弱い子供への個別の補充学習。</li> </ul> →一人も見逃さない手厚い指導。
6	基礎基本の定着の重視と少人数指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展的な学習よりも、基礎基本の定着を重視。</li> <li>・チームティーチングや少人数指導。</li> </ul>	
7	補充学習	・放課後や夏期休業期間中の補習。	



## 学校と地域の連携

平成25年度報告	今回の調査で特徴的に見られた点
<ul style="list-style-type: none"><li>・地域人材の積極的な登用・活用(学校外リソースを学校に活用)。</li><li>・学校による地域への貢献。子供による地域活性化(学校内リソースを地域に活用)。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域との連携。(例:地域の一員として、防災活動に取り組む。自治体でキャリア教育を推進。地域人材リストの作成。)</li></ul>

## 高い成果を上げている学校の教師の意識

- 平成25－26年度の訪問調査では高い成果を挙げている学校の取組の特徴を抽出・分析  
→取組を行うのはあくまで個々の教師であり、取組を徹底させている教師の特徴(傾向・意識)について検討する。
- 平成29年度の訪問調査では、前回調査に引き続き、学校や教育委員会の取組を検討するとともに、調査校に勤務する教師の意識をインタビュー調査により明らかにすることを試みる。
- 5年間継続して高い成果を挙げている学校であることから、インタビュー対象者として教職初任者と着任間もない教師は除くよう学校に依頼。各学校より2名選出。全19名。現勤務校に着任して5年以下の教師が7名(1年目は2名)、5年以上の教師が12名)、教職初任者(20代)はゼロ。

## 取組の徹底を継承する意識の流れの想定

A: 自身はどのような子供に成長して欲しいと願っているのか(育てたい子供像)



B: その実現のためにはどのような力を付けることが必要であると考え(能力観、  
学力観)

←a: 子供の家庭環境といった外的要因の実態把握を重視して

←b: 校内での子供の様子の実態把握を重視して

C: 何に取り組んでいるのか。その際、自身の取組を校内の共通実践にどう位置  
付け、意味づけているのか。



D: 取組の徹底と継承の意識へ

## 結果①

### 子供の実態把握と校内の取組との関係に関する意識

- 実態把握において、以下の2パターン
  - a:家庭環境や学校外の環境を重視する教師(少数)
  - b:校内の子供の様子を重視する教師
    - aの例:SESが最も低かった小学校の教師「親に話を聞いてもらえない」
      - 子供が話さなくなる
      - 表現が苦手になる、として家庭環境を意識。この意識から校内の「子供同士が関わり合って学ぶ」共有実践を意味づけ継承すべきことと認識している。
- SESが最も高かった中学校の教師は通塾率の高さを意識。「塾では出来ない私たちの授業の中での何かつけるべき力をつけてあげたい。塾に負けないように教師集団が頑張っていこうという気分は先生達の意識の中にずっとある。そういう気迫」を校内で継承。

## 結果②

### 経験や実践の事実に基づいた年度間、 世代間を通じた取組の継承の意識の高さ

- 訪問校の半数の5校が過去にいわゆる「荒れ」を経験。  
→中学校の場合、小学校からの積み重ねという認識。  
→小・中で、荒れの経験や事実、取組を継承する必要性が示唆。
- 小学校のある教師は生活習慣や学習習慣で成果がみられた取組は「年度を超えてつなげる、継承しようという意識。おかげさになればスピリッツ」が校内にあると評価。
- 荒れを経験していない教師に対する取組の継承(なぜこの取組が必要とされているのか)の危機感も。

## 結果③ 生徒指導と学習指導の関係性への意識の高さ

- 指導の重点は生活指導
  - 学習指導(②の「荒れ」の事実と、その克服経験の共有とも関係)。逆を挙げた教師はゼロ。
  - 「学力がついたから荒れなくなったのではなく、荒れが無いから学力が上がった」(中学校)、  
「生活指導に力を入れる必要が無く、学習指導に傾注できる傾向、雰囲気を整っている」  
「学習規律以上に生活規律だった時期を経てきた。子供も保護者も積み重ねが大切。  
子供が変わってゆくと保護者も変わっていく」(小学校)等々。
- 徹底した生活指導により学校が落ち着く
  - 子供の間人間関係が良好になる。
  - 学び合いの授業の取組(全10校が掲げている校内共通実践)が成立。
  - 生活指導の充実には教科外活動(特別活動を含む)も積極的に推進。

## 結果④

### 校内での子供の実態に基づき学び合いの取組を意義づける意識

- 子供の落ち着きは学習指導の前提である一方で、教師の指示には従うものの、積極性の乏しさとしても把握。
- 学級内の個人差の大きさの把握。
  - 積極的に助け合いつつ学び合うことができる良好な人間関係からなる集団づくりの取組へ。
  - 言語活動の中でも、特に、互いに「聞くこと、話すこと」の重視(学習指導と生活指導の両方において)。

## 結果⑤

### 小学校の教師に特徴的な意識 —基礎基本の重視と個の思考を高めること—

- 語彙の貧弱さ(5校全て)
  - 語彙は象徴的な一面で、基礎的な力が全体的に落ちている(学習、生活両面において)という意識が高い。
- 「自分で考え、自分で判断する力」を育てる必要性(5校全て、中学校では出てこない)
  - 個の思考を高める取組として
    - a:個人で「書くこと」に重きを置く教師・・・家庭学習のきめ細やかなフォローにも反映か。
    - b:学び合いを手段として、最終的に自己の思考を深めることを期待する教師



## 結果⑥ 中学校の教師に特徴的な意識 —生涯学習的・キャリア教育的視点—

- 将来の社会生活を見通した力を育む意識の高さ
  - a:授業での「学び合い」や協働的な課題解決学習を通してコミュニケーション能力を育むことに重点をおく教師
  - b:教科学習の成果が将来の社会生活に結びつくことを意識させる授業作りに重点をおく教師

## 6. 事例分析

### (2) 成果を上げつつある学校

## 【関心】

- 「SESから予測される学力を相当程度下回る成果を上げている学校」は、「SESから予測される学力を相当程度上回る成果を上げている学校」の単純な裏返しではないのではないか。
- しかもどうしたらこの状況から脱出できるかに苦慮している、実はより深刻な対象。高い成果を上げている学校での取組を容易に導入することが困難。どうしたら回復が可能か。

## 【ヒアリングの対象】

- C県B市立A中学校 前校長 現校長 現教頭
- 地方中都市 周縁に位置
- SES 第2ランク

年度	H25	H26	H27	H28	H29
残差d(概数)	-10	-10	-5	±0	±0
校長A在任		0	0	0	
校長B在任					0
教頭C在任			0	0	0

平成26年度までは、SESから予測される学力水準を大きく下回る中学校

・平成27年度は回復の兆し

・平成28、平成29年度は、SESから予測される学力水準並みに

・方法論的にはヒアリングとドキュメント解析を用いたモノグラフ。統計的リアリティを追求し一般化を志向するのではなく、全体関連的にこの学校でのできごとのリアリティを描く

## 平成25年度までの状況

- A中学校は、いわゆる「荒れた学校」だった
  - 教育困難校。
- バックグラウンド
  - 地域・保護者と教師の信頼関係の欠如。
  - 小学校で学級崩壊。
- 学校の中で
  - 問題行動の多発。教師が疲弊。生徒指導に資源を割かねばならない。
  - 教師集団の危機感は希薄。行動しない教師集団。分裂する教師集団。
  - 幅を利かすサバイバル・ストラテジー（教師が自らの生活と教師としての誇りを守るためになにをしたらよいのかに腐心）。
  - 生徒への期待水準の低位安定化。

## 外的支援の変化

- 環境整備
  - XX年度に新校舎が落成、全教室にエアコンが導入される。
    - 廊下を自転車で走り回っていた生徒たちが教室に戻った。
  - ようやく改革に取り組む段階になったという校長の認識。
- 徐々に厚みを増した行政による条件整備
  - 県と市から各種の教師加配。現在では5以上に。
  - 人員自体が増えたことの直接的効果
    - たとえば、全国学力調査の分析ができるようになった。3クラス4展開の少人数指導。
  - 間接的効果
    - 加配されたので新たな取組をはじめて結果を報告する義務がある。
    - 新たな取組を納得してもらう契機。サバイバルストラテジーへの対抗が可能に。
- 地域住民等による支援
  - 学校支援地域本部の継続的な支援。少数だったが学校応援団の意義。

## A校長のリーダーシップと諸改革

- 平成26年4月 A校長が着任 「トップダウン型改革」(C教頭による表現)がはじまる。
- A校長着任当時の状況 事態に驚く
  - A問題-10 B問題-15 コンスタント 各種調査でも同じ
  - 感じられない危機意識 「はじめは見ていた」
- 改革に着手
  - 動く教師から動かす。動いてくれる教師と始める。
  - 指針の提示と対話。繰り返し訴える。
  - はじめた取組の成果を数字で示す。職員室で共感を得る。
- 改革の優先順位
  - 1 学習指導以前の問題
    - 生徒を一人の人格として接し、恫喝しない。 → 叱り方7箇条
    - 生徒・保護者との信頼関係の回復。
  - 2 落ち着いたところで授業改善等の諸改革へ

# 諸改革

- 授業改善
  - めあてを明確にする。振り返りの時間を設ける。対話型の授業等、C県教育委員会が推進するごくありふれた事柄を指針として提示。
  - 結果として、在任期間中に、「高い成果を上げている学校」に共通に見られた取組(第1回保護者調査実施時の委託研究を参照)の大半に着手。
  - 自習時間を可能な限り減らすための時間割の工夫。
- 研修
  - 2年目に、教科研修(従前どおり)に加えて、教科の枠を越えて全教師を巻き込むことのできるテーマを設定させた(例 ノート指導)。
  - やる気のある教師を校外の研修に積極的に派遣。
- 小中連携 B市の小中連携加配を使う
  - 中学校教師が小学校で教壇に立つ。中学入学前に、小学校を通じて宿題を出す。
  - 特別支援教育のユニバーサルデザインの考え方を小中で共有 普通学級の授業改善に生かす。
- 教師集団の改革は異動ではなく、育成を通じて行う
  - 長短ある所属職員をよりよく生かすための個別のケアや校内研修、組織運営等の方が大切。

## まとめ

- 学校として当たり前のことのできるような状況を作り出すことの大切さ
  - 学習指導以前の問題の重要性。
  - 保護者、児童生徒との信頼関係が基盤。
- 「詰まるところ、学校の荒れは、子供と家庭に起因していたと思いますか」と問うたところ、即座に「教師が問題」という答えがB校長とC教頭から返ってきた
  - どのような生徒も受け入れて指導するのが公立学校教師の使命だという信念。
  - 教師の対応次第で必ず変わるという成功体験。成功体験を改革途上で得てもらう手法は有効。
  - 他方、単に教師を鼓舞するだけなど意識改革を強調しすぎると根性論に墮す危険。
- 教師をがんばる気にさせる条件を明確にすることが急務
  - 校舎等の環境改善に行政が資源を投下。意外に有効。
  - 教師の加配。
  - 原因を見極め、教師集団を動かす校長のリーダーシップ。



## 7. その他の分析

(1) 学校SESと学力の関連：都市規模による差異

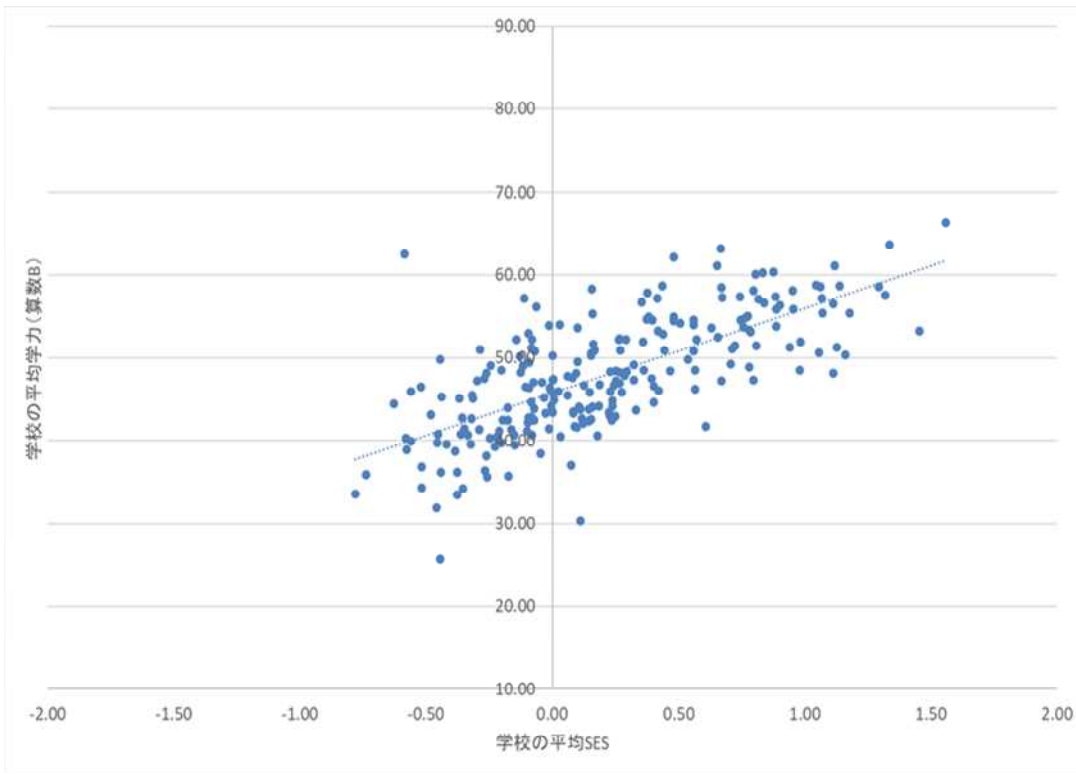


表1:大都市における学校SESと学力の関係

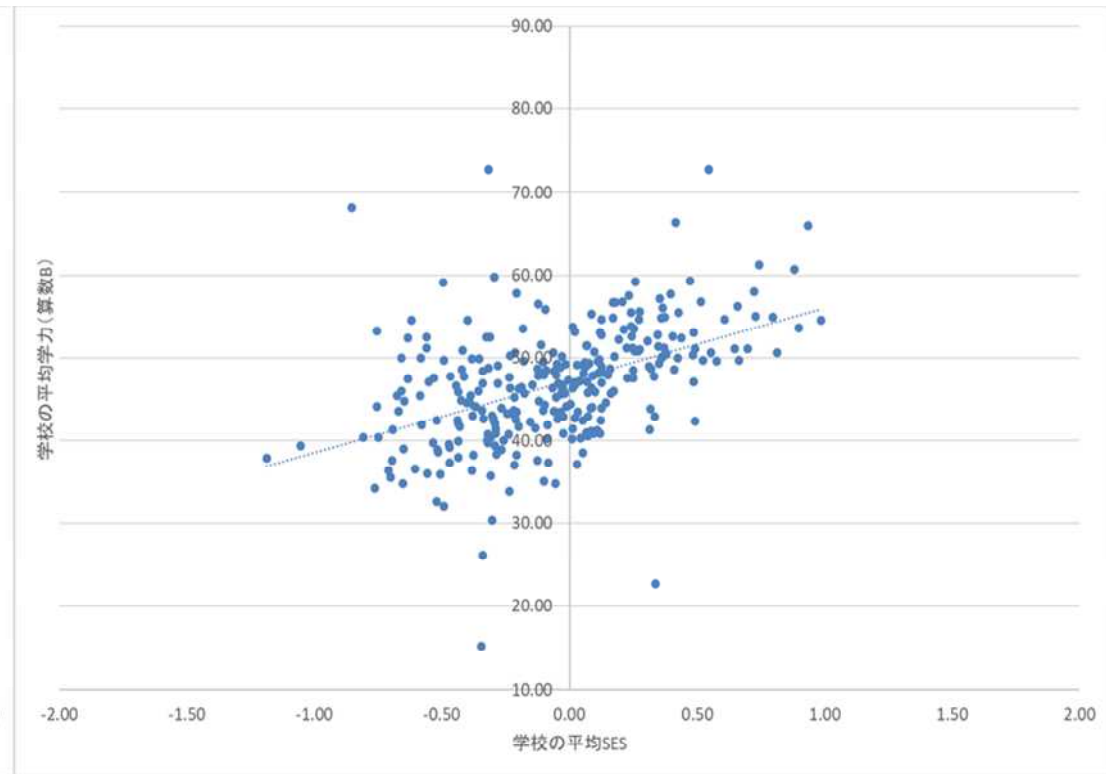


表2:中核市における学校SESと学力の関係

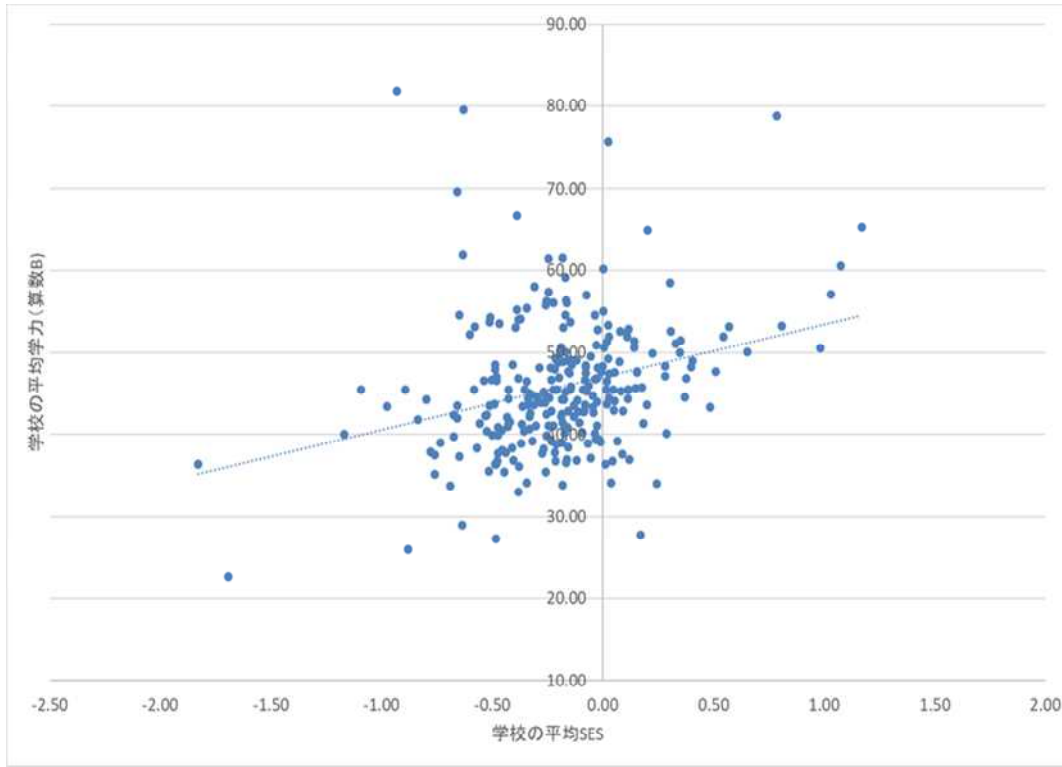


表3: その他の市における学校SESと学力の関係

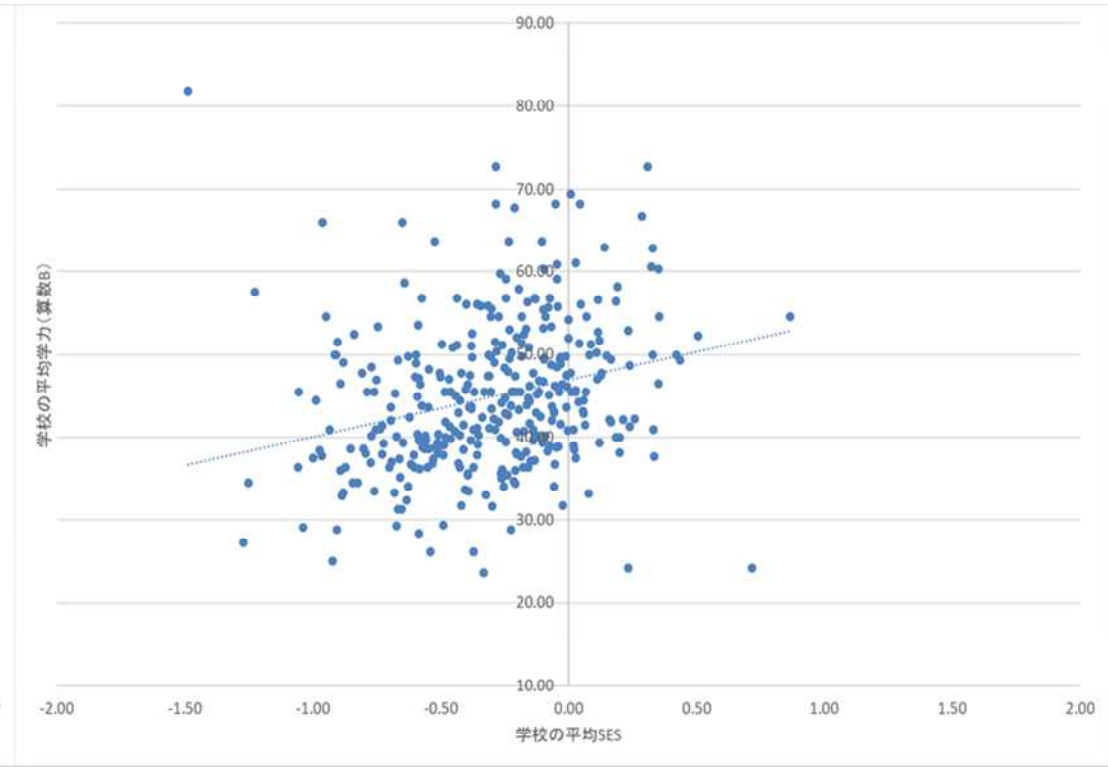


表4: 町村における学校SESと学力の関係

小学校では、大都市において学校SESと学校平均学力の相関が最も強い。  
その他の市・町村では相関は比較的弱い。

## 7. その他の分析

(2) 大都市において経済的不利を克服している  
家庭の取組

- 家庭の経済状況と子供の学力の関係が特に強いのは、大都市においてである。
- 世帯年収と算数B正答率との相関係数を見ると、大都市では0.283、中核市では0.241、その他の市では0.218、町村部では0.172である。(他の教育段階、教科、問題で見ても、大都市において世帯年収と学力の関係が強くなる傾向は変わらない)。
- 本研究では、大都市における年収300万円未満世帯の児童について、学力層別に保護者がどのような(子供への)働きかけをしているかを見た
- 学力A層では次のような家庭が相対的に多い(①～③)。

## ①生活習慣:

「子供が決まった時刻に起きるよう(起こすよう)にしている」「テレビ・ビデオ・DVDを見たり, 聞いたりする時間などのルールを決めている」「テレビゲーム(コンピュータゲーム, 携帯式のゲーム, 携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む)をする時間を限定している」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」

## ②接し方:

「子供のよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている」「子供に本や新聞を読むようにすすめている」「子供と読んだ本の感想を話し合ったりしている」「子供が小さいころ, 絵本の読み聞かせをした」「子供と何のために勉強するかについて話している」「計画的に勉強するよう子供に促している」「子供が外国語や外国の文化に触れるよう意識している」「地域社会などでのボランティア活動等に参加するよう子供に促している」

### ③保護者の行動:

「授業参観や運動会などの学校行事への参加」「PTA活動や保護者会などへの参加」「学校支援, 放課後学習支援, 土曜学習支援など, 地域と学校の連携・協働に関わる活動へのボランティアとしての参加」「自治会・子供会・お子さんと一緒に行う体験活動(生活・文化体験, 自然体験, 社会体験)などの地域活動への参加」「地域の行事に子供と一緒に参加する」「本を読む(本は、電子書籍は含むが、漫画や雑誌は除く)」「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む(新聞は、電子新聞を含む)」

## 7. その他の分析

### (3) 「教育効果の高い学校」の特徴の地域差



- 「教育効果の高い学校」(学校が置かれている社会経済的背景から推計される学力を大きく上回っている学校)の特徴が地域(都市規模)によってどのように異なるのかを検討。
- 学力(算数[数学]A、算数[数学]B)を従属変数、学校SESを独立変数とした回帰分析を都市規模別に行い、残差を算出。
- 最も残差の値が大きいほうから25校(教育効果の高い学校)と、値の小さいほうから25校(教育効果の低い学校)を特定し、それぞれのグループ間で学校の学力向上への取り組みや指導方法の違いを地域別に検討。
- 「教育効果の高い学校」の特徴に地域差がみられた。

## 大都市における「教育効果の高い学校」の特徴（小学校）

- 授業の中で目標(めあて・ねらい)を示す活動を計画的に取り入れた。
- 資料を使って発表ができるよう指導した。
- 将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした。
- 前年度までに、近隣等の中学校と、教育目標を共有する取り組みを行った。
- 授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会の設定を行った。
- 学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいる。

# 報告書の構成

## 【第1部】統計分析

(家庭環境と学力)

- 第1章 家庭の社会経済的背景(SES)の尺度構成
- 第2章 家庭環境と子供の学力
- 第3章 家庭の社会経済的背景・「非認知スキル」・子供の学力
- 第4章 小学生の学力と家庭の文化的環境
- 第5章 学力格差の変動—平成25年度と平成29年度の比較分析—

(家庭背景による学力格差の克服:レジリエンス)

- 第6章 大都市において経済的不利を克服している家庭の取り組み
- 第7章 不利な環境を克服している児童生徒の特徴

(社会経済的背景・学校・学力)

- 第8章 学校内での社会経済的背景の分散と学力
- 第9章 学校SESと学力の関連:都市規模による差異

- 第10章 「教育効果の高い学校」の地域差
- 第11章 学校の地域特性と社会経済的背景
- 第12章 継続的に学力の高い学校の風土は「良い」のか？

## 【第2部】事例分析

- 第13章 継続的に成果をあげている学校の抽出
- 第14章 高い成果を上げている学校 —事例研究—
- 第15章 成果を上げつつある学校 —事例研究—
- 第16章 高い成果を上げている学校・教育委員会の訪問レポート

## 【第3部】補論及び集計表

- 第17章 保護者調査のウェイト作成
- 第18章 保護者調査集計表

# 実施委員会

浜野隆	お茶の水女子大学教授
耳塚寛明	お茶の水女子大学教授
土屋隆裕	横浜市立大学教授
石井恭子	玉川大学教授
山田哲也	一橋大学教授
垂見裕子	武蔵大学教授
金子真理子	東京学芸大学教授
富士原紀絵	お茶の水女子大学准教授
中島ゆり	長崎大学准教授
中西啓喜	早稲田大学助教